スーパースター。

藤堂 えみか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーパースター。

【Ｎコード】
Ｎ４７４９Ｄ

【作者名】
藤堂　えみか

【あらすじ】
生きているみんなが主役。たとえ舞台が違ってもスーパースターなんだ。恋と仕事。きっと毎日は愛しいはず。

第1話

季節は冬。

お正月も、とっくに終わり、またいつも通りの毎日が始まった。

午前7時。
携帯の着うたが、あたしを叩き起こす。

「くうう〜っ…」

冬って何で布団から出れなくなっちゃうんだろうと、いつも頭で疑問を浮かべては

冬だからだろ！と自分でツッコミを入れて目を覚まして布団から飛び上がるように起きている。

バカな疑問だ。

寝ぼけ眼でリビングに行き
「おはよー」と母に挨拶。

飼っているダックスフントのココが

あたしに飛びついてきたから、しばらく撫でていた。

「可愛いなぁ」

何も言わず
ジーッと
あたしを見つめているココ。

…いや見てない。
あたしの朝食を狙っている。

知らん顔で
あたしは朝食をとり、片付けると
ココは布団に行き、スヤスヤと眠りだした。

（犬っていいな）

とココを横目に
うっすら考えた。

身仕度をして
化粧も済ませて
ぼんやりと朝のニュースを見ていた。

仕事に出るまで
まだ1時間ある。

突然
携帯が鳴りだした。

（あっ、メールだ）

メールの相手は、小学校からの親友の
佐々野　楓だ。

内容は
《今日空いてる？》のみ。

（女の子なんだから絵文字ぐらい入れて欲しい…）

《空いてるよ（＾＾）》と返信した。

《あかりも空いてるって言うから飲み会しない？男もいるし。》

《うん！行きたい（＾∀＾）》

《じゃあ20時にいつもの居酒屋に集合ね。》

あたし達も今年で２２歳。そろそろ恋でもしたい時期だもん！
今日は気合い入れなきゃね！

「朝からテンション上がってきたぁっ」

跳ねるように立ち上がった時
ココがビックリして、目を見開いていた。

いつも通り
仕事に向かった。
これから起こる出来事など知る由もなく…

「行ってきまーす！」

あたしは
家を出て行った―。

第1話（後書き）

次話も頑張ります（＾＾）

第2話

午後１９時。

「お先に失礼しま―す」

仕事を終えて
帰宅するところ。

冷たい夜風が頬を撫でる

「うわぁ…寒い…」

吐く息も白く、自転車を漕ぎながら独り言が漏れてしまった。

手袋をしても、キーンと痛むような感覚は冬ならでは。
耳も冷たくて痛い。
乾いた空気。

夜の街。
すれ違う人。
ネオンの光。

あたしは
夜の街が
好きだった。
いつもの景色だけど、昼間とは違った印象―。

そんなことを考えているうちに家に到着。

慌てるように
化粧をすると
構って欲しいとココが飛びついてくる。
無視していると、何かを察したのか、くるりと反対を向いて台所にいる母親の元へテクテクと歩いていった。

（そんなに気合いを入れる必要もないんだけど…）

期待してる訳じゃないのに、自然と化粧に力が入ってしまうのは乙女心というものか…複雑な感じがした。

午後１９時半。
いつもの居酒屋へと向かう。

いつもと違う。
ドキドキしてる。

もともと
男の人と接することも慣れてなくて、あたしは内向的。
よく片思いもしたし、付き合っても長続きなんてしない。

だけど…恋がしたい。

居酒屋に着いて
お店の人に席を案内されるまでの間、ずっとずっと、ドキドキしていた。

「こちらです。」

「あっ！来た来たっ！優こっち！」

呼ばれた方向を見ると
メールをくれた
親友
佐々野　楓（２２）が
テーブル席から大きく手を振っていた。

その隣に親友の
石田　あかり（２２）

向かい側に
男性３人が座っていた。
（なんだか格好よさそうな人達だな…）

席につく前に
慌てて
「藤沢　優です。よろしくお願いしますっ。」

と一礼した。

「優っ！さぁさぁ座って」
楓が既にホロ酔いしてるのが感じ取れた。

「楓もう酔ってんの？！」
思わず言ってしまった。

「酔ってませーんっ！」
楓が陽気に返事した。普段ぁ無口並みにクールぶってるのに…。

「…軽く出来上がってるだけよ。いつもより明るくていいじゃん。」
あかりがニコッと微笑んだ。

「男性陣も自己紹介してくれる？」
ホロ酔いした楓の横で冷静な
あかりが仕切ってくれた。

「あっ、俺からだね！楓と同じ大学でバンドやってる津田　涼って
言います！よろしくっ！」

爽やかで明るい印象だ。笑顔が可愛い感じ。

「涼の兄貴の友達で、よくコイツらの面倒みてる浅井　真二です。
会社員２５歳。よろしく。」

優しそうな兄貴オーラ。薄茶色のサングラスをかけていて、スーツ
姿で紳士的な感じ。

「…涼と幼なじみの松下　一馬。仕事は会社員。…たまに涼がやってるバンドで演奏してる。」

前髪が金髪であとは黒髪。ミュージシャンって言葉が当てはまるような綺麗な顔立ちだ。

不思議と打ち解けたように、すんなり飲み会が始まって、楽しい飲み会が始まった。

「男性陣も自己紹介してくれる？」

ホロ酔いした楓の横で冷静なあかりが仕切ってくれた。

「あっ、俺からだね！楓と同じ大学でバンドやってる津田　涼って言います！よろしくっ！」

爽やかで明るい印象だ。笑顔が可愛い感じ。

「涼の兄貴の友達で、よくコイツらの面倒みてる浅井　真二です。会社員２５歳。よろしく。」

優しそうな兄貴オーラ。薄茶色のサングラスをかけていて、スーツ姿で紳士的な感じ。

「…涼と幼なじみの松下　一馬。仕事は会社員。…たまに涼がやってるバンドで演奏してる。」

前髪が金髪であとは黒髪。ミュージシャンって言葉が当てはまるような綺麗な顔立ちだ。

不思議と打ち解けたように、すんなり飲み会が始まった。

かれこれ2時間は過ぎただろうか。

最初は、みんな交えて話していたけど、徐々にグループ化してきた。

あたしと楓は涼くんと一馬くんと話している。

あかりは真二さんと話している。

あたしも口数が減り始めて

（ん――…）

久しぶりの酒は、酔いが回りやすい。

とりあえず

トイレに席を立った。

（気持ち悪…）

少しトイレで休んで、女子トイレを出ると

「優ちゃん大丈夫？」

（えっ…？）

目の前にいたのは、浅井さんだった。

心臓が止まると

思った―。

「えっ…浅井さん…何故ここに？」

「なかなか戻らないから心配でね。少しは良くなった？」

「あっ…はい…っ」

「なら良かったよ。」

ホッとしたような笑みを見せた浅井さんに憧れに似た感情を覚えた。

浅井さんが
微笑んだ時
ふわっと髪が
なびいて
サングラスから
見えた眼差しは
とても
暖かく感じた―。

（…うっ）
気が緩んだ途端に
立ちくらみに
襲われて
倒れる寸前

「優ちゃんっ」

力強く抱きとめられた。
気づいた時には
浅井さんの胸に
あたしは居た。

「…っごめんなさいっ」

動揺して
慌てて離れる。

「僕は平気だよ。歩ける？」
顔色ひとつ変えずに浅井さんは声を掛けた。

「はっ…はいっ！じゃあ戻りましょうかっ」
心臓がバクバクしている。

ほんの数分の
出来事なのに…
あたしってば変なの…。

再び
席に戻っても
フラッシュバックのように繰り返される。
好きという感覚とは少し違うような…

あたしの頭は、しばらくボーっとしていたのは間違いなかったー。

第2話（後書き）

引き続き頑張ります（・ω・）

第3話

夜の２３時を回った頃、先に口を開いたのは
真二さんだった。

「今日はそろそろ切り上げようか。」

ニコッと微笑んだ。
「てか、真二先輩って酒強すぎっすよ！俺かなり酔ってるんすよ？」

爽やか青年の涼が絡み始めた。

「お前ら男どもの面倒見んのは俺なんだよ。一緒に酔ってどうすんだよ。」

笑いながら涼に言い返す。

「涼は…どうしようもないっすよね…」
一馬も口を挟んだ。やはり軽く酔っているようだけど
クールな話し方は変わってなかった。

「うちらも終電とかあるしね。」
姉御肌のあかりが淡々と話している。

「あかりチャンて酒強いんだねぇ～。」
涼が感心するようにつぶやいた。

「まぁね。」

あかりは
フフンと笑った。

「あかりは涼より酒強いっつの！」

横から酔って饒舌な楓がケラケラ笑いながら言った。

みんなで笑った。
あっという間の
飲み会を惜しむように―。

ゾロゾロと店を出ると外は寒くてブルブル震えた。

「じゃあ、お疲れ様。気をつけてね。」

「また飲み会やろーねぇーっ！」

「ばばーいっ！」

ハイテンションの楓と涼が
お互いに叫んでいたのが印象的だった。

「楓ってば元気すぎだよね」
あたしは笑いながら、あかりに話しかけた。

「こっちは大変だっつーのに！」
あかりも笑いながら答えた。
「普段から、これくらい明るければいいんだけどね～…」
あかりがつぶやいた。
「ねぇねぇ！楽しかったぁ？いい男いた？」
楓が予想通り、うちらに絡んできた。
「楓サンうるさいんですけどーっ」
あかりが笑いながら答える。

「うちらも小学校からの付き合いだけど、変わんないよねぇ…」
あたしは、ぽつりと言った。
「あかりはクラスでリーダー的な存在だったし、楓は歌が上手くて注目されてたしさ。…あたしは地味だったなぁ」
「優だって、みんなに囲まれてたじゃん？」
楓が言う。
「あたしは、八方美人だっただけだよ。いつも嫌われたくないって思ってたからさ。」
あたしは答えた。
「―…色々あったもんね。」
あかりも口を開いた。

「うんー。」

「じゃ、また今度ね！お疲れ―！」

家に着いたのは
夜２３時半を回った頃。
夜は不思議な感じがする。
時に不安を与えるような時間が流れてく。
思い返す、過去の出来事―。

いつも
誰かに憧れて
いつも
自分が嫌いだった。
誰かに
嫌われるコトが
怖いのは
今も変わってない。

全てを
さらけ出せるほど

あたしは
強くなんてない。

玄関を抜けて
お風呂場に着いて
洗面台に立った
あたしの姿は
弱々しい。

こうやって
改めて見る姿は
やっぱり嫌。
まわりを気にして、気を使ってる。どこか怯えたように、本音で話し合える人も少ない。

今は、それで良かったと思う。
だけど、あの頃は―…。

「…しっかりしなきゃ。」
あたしはバシャバシャと顔を洗った。

「なぁ、火ィ持ってない？」
真二が一馬に聞く。

「どうぞ…」
一馬がライターを差し出した。
「お前ら帰れるか？タクシー代出すけど」
いつものように、くわえ煙草をしながら真二が財布を開くと
「いや、二人分なんて悪いっすよ！一馬は俺んとこ泊まってくんで！」
涼が遠慮した。
「男二人で今日の反省会でもすんのか？」
クスクス笑いながら真二が聞いた。
「えっ！！んなわけないですって！！」
慌てて涼が答えた。
「冗談だよ。」
フーッと煙を吐いて真二が笑った。
「お前ら心配だから持ってけ。じゃあな。」
涼にタクシー代と一馬のライターを渡して、真二は帰っていった。
「お疲れ様っす！」二人は頭を下げた。
「カッコいいよなぁ、真二さんて…」
一馬は煙草に火をつける。
「カッコ良すぎだろ～」
涼が答えた。
「また飲み会したいなぁ～…」

涼はぼやいた。

「また楓に頼めばセッティングしてくれるんじゃねぇの？」一馬はプカプカと煙草を吸っていた。

誰かが
言ってた気がする

出会いは貴重だ。

あたしは
バスタブの中で
今日の出来事を
思い出していた。

楓とあかり
涼くんと一馬くん

そして
真二さん―…

この出会いが
大切な思い出に
なったのは

きっと
あたしだけじゃないはず…。

自分に
問いかけた。

貴重だった？と―…。

第3話（後書き）

次回も頑張ります（・ω・）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4749d/

スーパースター。

2011年10月4日18時38分発行